

サ変動詞

どなたもご存じのように日本語には漢語や外来語に“する”を付加してサ変動詞を作る方法があります、このやり方の起源はおそらく漢文訓読に由来するものと思われ、漢文訓読法が展開され様々な流儀が生まれ始めた10世紀には広まっていたと考えられます。因みに9世紀前半に成立したと言われる『竹取物語』にもすでに“愁訴せし” “御覧じ” “制し”などが使われていました。“～をする”の“を”が取れた形であり、両方とも使われている例も沢山あります。

一字漢語で促音で終わる“準じる” “論じる” “演じる” “感じる”などの場合は鼻音の影響で後続語が濁音化しますが、“～ずる”の他に“～じる”の形が現れて今ではこちらの方が標準になり、前者はやや硬く古めかしい形と考えられているようです。

これと似たものに“軽んじる” “重んじる” “疎んじる” “甘んじる” “諳んじる”など“～んじる／んずる”の形があります。これは大和言葉から派生したのですが、漢文訓読体の“～みする”が音便変化したものとされています。

“唯天の賛くる所は、臣が恆に重みする所なり”（日本書紀）、“道人、道に違ひて皇憲を軽みするも、亦、玉條の重く、禁むる所なり”（続日本紀）

また“訳す” “託す” “策す”など後にサ変からサ行五段活用が変わったものもあります。

サ変が付加される語は行為を示す名詞とされていたようです。動詞 program の名詞形を使った“プログラミングする”は一般人には自然と思われませんが、“プログラム”が行為ではなくモノを指すからであり、そうではない“アクセスする” “セーブする”などは不自然には感じられません。専門家の間では簡略さのゆえにか“プログラムする”の形も用いられています。外来語を略形にした“オペする”や擬音語に基づく“チンする”などの形も用いられています。私も子供達とのメールで「元気してる？」などと書きますが、サ変の生産力はますます盛んなようです。なお、日本語では動作を示す名詞の他に“しっかりする”、“はっきりする”など副詞系の言葉からもサ変動詞を作ることができます。

日本語でもう一つ似た形があります。“たそがれる”は“誰そ彼時”という名詞からできたもので、最近の用法はともかく言葉としては昔からあり、他にも“愚痴る” “皮肉る”などあって、今でも“告る” “事故る”など生きています。古くは“サボる” “ダブる” “ネグる”、最近では “ググる”など特に外来語の略形と一緒によく使われています。この名詞に“る”を加える形は、“る”を動詞化語尾とする、サ変タイプとは別の動詞化方法と考えられます。

このテーマを取り上げたのは、実は外国語でも同様の方式を用いている言語が結構あるからです。

韓国語は日本語と同様に漢語を多数採り入れてきましたが、non hada（論ずる）、yogu hada（要求する）、yuji hada（維持する）、unjeon hada（運転する）、kongbu hada（工夫[勉強]する）、choghwa hada（初期化する）など漢語にhada（する）を付加した語がとても沢山あります。aeksesu hada（アクセスする）、sain hada（サインする）など英語、il hada（仕事する）、sarang hada（愛する）など韓言葉、ijime hada（いじめる）など日本語に付加したものもあります。受身形はdoeda（なる）を使い、yogu doeda（要求される）、yuji doeda（維持される）などと言います。またsikhidaに変えると使役形になります。なお、日本語で「する」がついて自動詞の意味になるものでも他の動作主からの働きかけによるものは、kamyem doeda（感染する）や tangcheom doeda（当選する）などやはりdoedaを付けます。逆に、maeryo sikida（魅了する）のようにsikhida（させる）を使う例もあります。二十世紀前半にはもっぱら hadaが使われていたのが、現代になって上記以外の補助動詞も含めていろんな

動詞を使い分けるようになったとのこと。

モンゴル語では固有語では *dasgal khīkh* (運動する)、*surguuli khīkh* (訓練する)、ロシア語から *redaktorlakh* (編集する)、中国語から *shilian khīkh* (失恋する)、*dagong khīkh* (アルバイト[打工]する) など。

ヒンディー語では固有語で *bāt karnā* (話をする)、*kām karnā* (仕事をする)、サンスクリットから *prayās karnā* (努力する)、*prāpt karnā* (獲得する)、アラビア語から *intezār karnā* (待つ)、*muqarrar karnā* (任命する)、*tasvīr khīncnā* (写真を撮る)、ペルシア語から *band karnā* (閉じる)、英語から *cêk karnā* (チェックする) などがあります。karnāを honā に変えると自動詞や受身になります。ベンガル語も同様です。

タミル語でも *yaattirai cey* (旅行する)、*visaaraṇai cey* (調べる) など *cey* (する) を使った言い方があるそうです。

ペルシア語ではアラビア語を大量に採り入れており、名詞形に *kardan* (する) を付けて *harakat kardan* (動く)、*hess kardan* (感じる)、*hall kardan* (溶解する、解決する) など、形容詞や過去分詞に *kardan* を付けて *ṣāf kardan* (きれいにする)、*ma'mūr kardan* (任命する) などが作られています。多数の変化形を持つアラビア語動詞の頻用される名詞形や分詞形を、ペルシア語で名詞や形容詞として固定することによって、アラビア語彙がインドやトルキスタンの広い地域でも利用しやすくなったと言えましょう。ペルシア語の名詞から *bar khord kardan* (衝突する)、*gasht kardan* (散歩する)、形容詞からも *bāz kardan* (開ける)、*peidā kardan* (見つける)、トルコ語から *komak kardan* (助ける)、フランス語から *ānkādr kardan* (棒で囲む)、ロシア語から *tormoz kardan* (ブレーキをかける) などがあります。また動詞句を名詞化して *'alāmat gozāshtan* (マークを付ける) を *'alāmat gozārī* (マーク付け) とし、これに *kardan* を付けて *'alāmat gozārī kardan* (マーク付けする) としたり、*jam' āvardan* (集める) を *jam'-āvarī* (収集) とし さらに *jam'-āvarī kardan* (収集する) とする形もあります。これは立て膝、突き指、忘れ物、入れ知恵 (を) などと似ていますね。受身形や自動詞にするには *kardan* の代わりに *shodan* (なる) を使います。なお、アラビア語の現在分詞に *būdan* (be) や *shodan* を添えて、*māyel būdan* (好む)、*māyel shodan* (したいと思う)、*mota'assef shodan* (残念がる) などの形ができます。

トルコ語では、固有語から *yardım etmek* (助ける)、*buyur etmek* (歓迎する)、ペルシア語から *viran etmek* (荒廃させる)、*tasa etmek* (心配する)、アラビア語から *hareket etmek* (行動する)、*tavsiye etmek* (忠告する)、*acele etmek* (急ぐ)、フランス語から *şarj etmek* (充電する)、*dans etmek* (ダンスする) などがあります。そのうち、*zannetmek* (思う)、*kaybetmek* (失う) など単音節の名詞は融合して一語になります。*etmek* をその受身形 *edilmek* や *olmak* (なる)、*görmek* (見る) などに変えると受身になります。この他、*yapmak* (make) を使うものもあります。*park yapmak* (駐車する)。

これらの言語では語意に応じて“する”以外の動詞を付けることも行われています。

voṭ denā (give vote、投票する)、*dūsh gereftan* (get shower、シャワーを浴びる)、*ceza vermek* (give punishment、罰する)

珍しい所では、ピレネー山麓のバスク語にも似た用法があるそうです。*egin* は動詞として *do*、*make* などの意味に使われますが、名詞についてそれを動詞化します。 *hitz* (言葉) + *egin* (話す) など。

韓国語では形容詞も動詞と似た活用をし、したがって漢語名詞に *hada* (する) を付けて形容詞を作ることができます。

tangdang hada (堂々たる)、*hwaryeo hada* (華麗なる)、*myo hada* (妙な)、*kang hada* (強い)、*kyeok hada* (激しい)、*seomateu hada* (スマートな)。他にも名詞を形容詞化する語尾が幾つかあるそうです。

日本の文語の形容動詞ナリ活用とタリ活用も、漢語名詞にアリを付けて形容動詞にする点で似ています。形容詞のカリ活用（悲しかりけり）や沖縄語のサリ（>サン）活用（ちゅらさん）も動詞と似た活用をする点では形容動詞と同様です。

これらの言語は、ペルシア語やバスク語も含めて、すべて基本的に SOV型です。目的語が動詞の前にあることが大きな前提条件でしょうか。大部分が日本語と同じ膠着語で、ヒンディー語もそれに近づいていますが、ペルシア語は屈折語です。

なお、フランス北東部に残るケルト語系のブルターニュ語には、通常の現在形と並んで **oder (do)**+動名詞で表す形があるそうです。

動詞化接辞

他の言語では外来語または固有語から動詞を作る方法として、名詞に動詞化語尾を付加して動詞にするものがあります。こちらは日本語の“る”を付ける方法と似ていますね。欧州諸語では、動詞化に接尾辞も接頭辞も用いています。

ロマンス語では、名詞や形容詞に動詞語尾 *-āre* などをつけると動詞ができます。たとえばイタリア語で *telefono* > *telefonare*、フランス語で *actif* > *activer*。接頭辞 *ad-* や *en-* を加えるものもあります。イタリア語で *terra* > *atterrare* (着陸する)、*bello* (beautiful) > *imbellire*、フランス語で *atterrir*、*embellir*。その他、スペイン語 *-ar* : *plantar*、*-ear* : *vocear*、*-ecer* : *enriquecer*、*-uar* (*-ate*) : *situar*。

ラテン語の動詞化接尾辞 *-ficāre* (例、*sacrificāre* < *sacer* (sacred)) は *facere* (する) の変形でつなぎ字 *-i-* が前接しますが、サ変型と同じ形式です。ラテン語が基本的に **SVO**型であることがその一因かと思われます。イタリア語 *-ificare*、スペイン語 *-ificar*、フランス語 *-ifier*、英語 *-ify*、ドイツ語 *-ifizieren* などに受け継がれています。スペイン語の *-iguar* もそれに由来するとされています。

ラテン語のもう一つの接尾辞 *-izāre* (例、*baptizāre*) は、実はギリシャ語 *-ίζω* から借用したもので、*-ίζω* は *ἐλπίζω* (希望) > *ἐλπίζω* (望む) など名詞や形容詞から動詞を作る語尾として使用されていました。これも似ていますが、ある動詞から派生したのではなく元々接尾辞だったそうです (*-ισμός* [*-ism*] も抽象名詞を作る接尾辞 *-μός* を付けたその派生形だとのこと)。これは、イタリア語 *-izzare*、スペイン語 *-izar*、フランス語 *-iser*、英語 *-ise/-ize*、ドイツ語 *-isieren*、スウェーデン語 *-isera*、ハンガリー語 *-izál* などに受け継がれています。なお、英語の綴りで *-ise* はフランス語から入ったままの形、*-ize* は語源を尊重し元のギリシア語、ラテン語に戻って改めた形だそうです。

ドイツ語にはロマンス系の接尾辞の他にゲルマン系の動詞化接尾辞 *-en* があります : *hart* (hard) > *härten*、*stark* > *stärken*、*schwach* (weak) > *schwächen*。接尾辞 *-ieren* (例、*zentrieren*) はロマンス系の語に使われます。この形は、イタリア語 *spaziare* (間隔をあける) > *spazieren* (散歩する) や古フランス語 *parlier* (話す) > *parlieren* (談話する) のように、ロマンス語の動詞語尾 *-re* にゲルマン語の接尾辞 *-en* を付加して出来たものようです。

英語においてロマンス系の語尾では *-fy*、*-ize* の他に、*-ate* はフランス語の *-er* 動詞 (例、*activate* < *activer*)、*-ish* は *-ir* 動詞 (例、*embellish* < *embellir*) に由来するようです。前者はラテン語の過去分詞 *-ātus* に由来し、後者は、*-ir* 動詞の変化形、例えば現在分詞 *-ssant* に見られる *-ss* の音を探り入れたものだそうです。ロマンス語系の接頭辞 *en-* (例、*enfeeble*) やゲルマン系の接尾辞 *-en* (例、*weaken*) もあります。その他、特定の語尾を持たずに名詞がそのまま動詞として使われているものも沢山あります。

英語にはラテン語から古フランス語を介して入った動詞が沢山あり、その中には形が大分変化したものもあります。例えば、*receive* は古フランス語の *receivre* (> 現代形 *recevoir*) から来たもので、これはラテン語の不定詞 *recipere* (< *re* + *capere* 取る) に由来するようです。不定詞語尾 *-re* は英語では削除されます。*contain* < 古仏 *contenir* < *continere* (< *con* + *tenēre* 握る) ; *admit* < 古仏 *admettre* < *admittere* (< *ad* + *mittere* 送る) ; *decide* < 古仏 *decider* < *dēcidere* (< *dē* + *cadere* 落ちる)。過去分詞などに由来するものもあります。*comprise* は古仏 *comprehendere* (< *comprehendere* < *con* + *prae* 前 + *hendere* 掴む) の過去分詞 *compris* から ; *construct* < *cōstruere* (< *con* + *struere* 積む) の過去分詞 *constructus* から : *compose* < 古仏 *composer* < *compōnere* (*con* + *pōnere* 置く) の過去形 *composuī* から (スペイン語は規則的な *componer*) 。

ロシア語では、名詞に-овать、-евать、-ствоватьを付けて動詞を作ることができます。外国語の名詞や動詞に付けることもできます：память（思い出）>памятовать（覚えている）、горе（悲しみ）>горевать（悲しむ）、атака（＜フランス語 attaque）>атаковать、ドイツ語 integrieren（統合する）>интегрировать、повесть（物語）>повествовать（物語る）、власть（権力）>властвовать（支配する）。ポーランド語 -ować、チェコ語 -ovat、セルビア語 -ovatiなど他のスラブ諸語も同様です。バルト諸語のリトアニア語やラトビア語にも類似の接尾辞 -auti、-uoti があるそうです。

SOV型の膠着語では、後ろに動詞化の接尾辞が付きます。

トルコ語では、サ変型の他に başlamak（頭＞始める）、zorlamak（力＞強制する）、programlamak、vedalaşmak（=veda etmek、別れを告げる）など動詞化語尾 -la を使って動詞化する方法もあります。-sa/seも susamak（水＞喉が渇く）や önemsemek（重要性＞重視する）のように動詞を作るのに使われます。

モンゴル語では、名詞や形容詞から動詞を作る語尾が沢山あります：too（数）>toolokh（数える）、ang（狩）>angakh（狩りする）、utas（糸/電話）>utasdakh（電話する）、bayan（富）>bayajikh（富む）、oir（近い）>oirtokh（近くなる）、nüür（顔）>nüüreldekh（面と向かう）。

フィン語では動詞から自動詞・再帰動詞を、形容詞から動詞を作る語尾 -utua、-ua や、形容詞から動詞を作る語尾 -ntaa が使われています：suuri（大きい）>suurentaa（大きくする）、kipeä（痛い）>kipeytyä（痛くなる）、musta（黒い）>mustua（黒くなる）。

ハンガリー語では名詞や形容詞に -z や -l を付けて動詞にすることができます：só（塩）>sózni（塩を付ける）、ágyú（大砲）>ágyúzni（砲撃する）、tenisz（テニス）>teniszezni、lárma（騒音）>lármázni（騒ぐ）、tűz（火）>tűzelni（火をつける）、tolmács（通訳）>tolmácsolni、apró（小さな）>aprózni（小さくする）、fehér（白い）>fehérlni（白くなる）、jó（良い）>javít（修理する）、öreg（老いた）>öregedik（老いる）。

その他、マレー語では、動詞を作りまた動詞に様々な意味を付与する様々な接頭辞や接尾辞があります。接頭辞 ber-、di-、ter- は自動詞を、per-、接尾辞 -kan、-i は他動詞を意味します。meN-（me-, mem-, men-, meny-, meng-）は動作主を主語、di- は動作対象を主語として、動作に着目した動詞を作り、ter- は状態・結果に着目した動詞を作ります。

kenal 知っている、menganal 知っている、mengenali 認識する、mengenalkan 紹介する、terkenal 知られている/有名な、berkenal 知り合う、berkenalan 引き合わせる/紹介する、memperkenalkan 導入する、ubah 違い > berubah 変わる、berubah-ubah たえず変わる、mengubah 変える、diubah 変更される、mengubahkan 変化させる、terubah 変化している、terubahkan 可変な。

最後に、中国語などでは動詞と名詞を区別する指標がなく、名詞をそのまま動詞として使います。これは「ゼロ派生」というそうです。英語でもよくありますね。こちらはかつての語尾 -en が消滅したためです。